

常滑市焼き物のまちの空間を

身体的経験に基づいた基礎資料を用いて認識することを試みる

日大生産工(学部)○伊藤 優太
日大生産工 篠崎 健一

1. はじめに

愛知県常滑市の栄町は焼き物のまちとして栄え、長い年月をかけて人が生活しつづけてきた。まちは起伏に富み、入り組んだ路地が多く、多様な空間をつくる。

私は小学生の頃初めて訪れた時からこのまちに惹かれ、以後度々訪れてきた。なぜこの場所に魅力を感じるのだろうか。本研究は、空間の身体的経験をもとに魅力的だと感じる空間の性質について考察をする。

2. 対象地域

常滑市栄町では、平安時代から陶器が盛んに作られてきた。明治から昭和初期にかけては、土管などを大量に生産し、不良品の土管や甕などをレンガやブロック、石の代わりに地盤固めや壁、塀に使って、まちを作ってきた。そのため、今でもその名残がまちなかに残り、レンガの煙突や工房の跡などとともに独特な景観を形づくり、人々の暮らしを包んでいる。

3. 方法

3. 1. 空間の体験

2015年8月21～22日、8月26日、9月3日に栄町に空間を実地に空間を体験した。まちの中を



Fig. 1 栄町の町並み

ただ歩くだけでなく、陶芸体験や、そこで暮らす人びとと会話するなどし、積極的にまちとの関わりをもつようにした。

3. 2. 空間体験の表現—写真日記の作成—

経験したことを写真日記1)として記録する。写真日記とは、空間を体験した経験を写真と記述によって表現したものである。記述は、誰もが同様に確認できることを記述した文章(事実記述)、撮影された事実から自分が読み取ったものごと、考えたものごとを記述した文章(現象記述)、撮影した場所で自分が経験したものごと、場所から受けた作用を記述する文章(経験記述)の三つの文章からなる。写真日記を作ることで、撮影時に意識していなかったことに気づくといった効用もある。

これらの経験を通して、合計58枚の写真日記を作成した。

3. 3. 空間の体験表現の構造化

写真日記を基礎資料とし、KJ法2)に従って基礎資料間の関係性に注目して、ボトムアップでグループ化する。基礎資料を第一段階でグループ化して形成されるグループをA(A01～A32)、Aグループとして形成された32資料を第二段階でグループ化して得られるグループをB(B01～B13)、第三段階のグループをC(C01～C07)として、最終的にグループD(D01～D04)を得る。この作業において大切なのは、順次グループ化する際に、そのグループが象徴すると考えるものごとを、短い文章で記しグループの表題(表札)とすることである。

Fig. 2にグループA～Dの表札とその階層を示した。

4. 結果. 設計提案

写真KJ法により、ひとつのまとまりとして構造化されたまちの空間の性質(D01～D04)が得

The attempt to recognize on the basis of the physical experience space in Tokoname .

Yuta ITO, Kenichi SHINOZAKI

られた。これをもとに同まちにおいて、建築空間の設計を試みる。

公共的な建築や空間をその場所に定着させる試みは、「真壁伝承館」3)において、「サンプリングとアセンブリー」という手法によって、伝統的な地域空間に潜在する形状や材料などを抽出し、再構成することで伝統的な街並みに対して新たな景観をつくりだそうとした。また、「みんなの家プロジェクト」4)においては、「みんなの家」という小さな建築をつくるプロセスを共有することで、ひとびとに働きかけようとした。

本研究は、これらの試みのようにいかに設計する建築をその場につなぎとめ定着させるかという手法を問題とするがその方法として身

体的経験から読み取った空間の本質的なものごとを建築空間に反映させたいと考えている。

「参考文献」

- 1) 川喜田二郎,「発想法一創造性開発のために一」, 中公新書, (1967)
- 2) 諏訪 正樹, 藤井 晴行, 知のデザイン, (2015), p. 142~150
- 3) 木下庸子, 渡邊真里, 新谷真人が設計した多目的複合施設
- 4) 伊東豊雄, 山本理顕, 内藤廣, 隈研吾, 妹島和世が行った被災地支援活動の建築プロジェクト

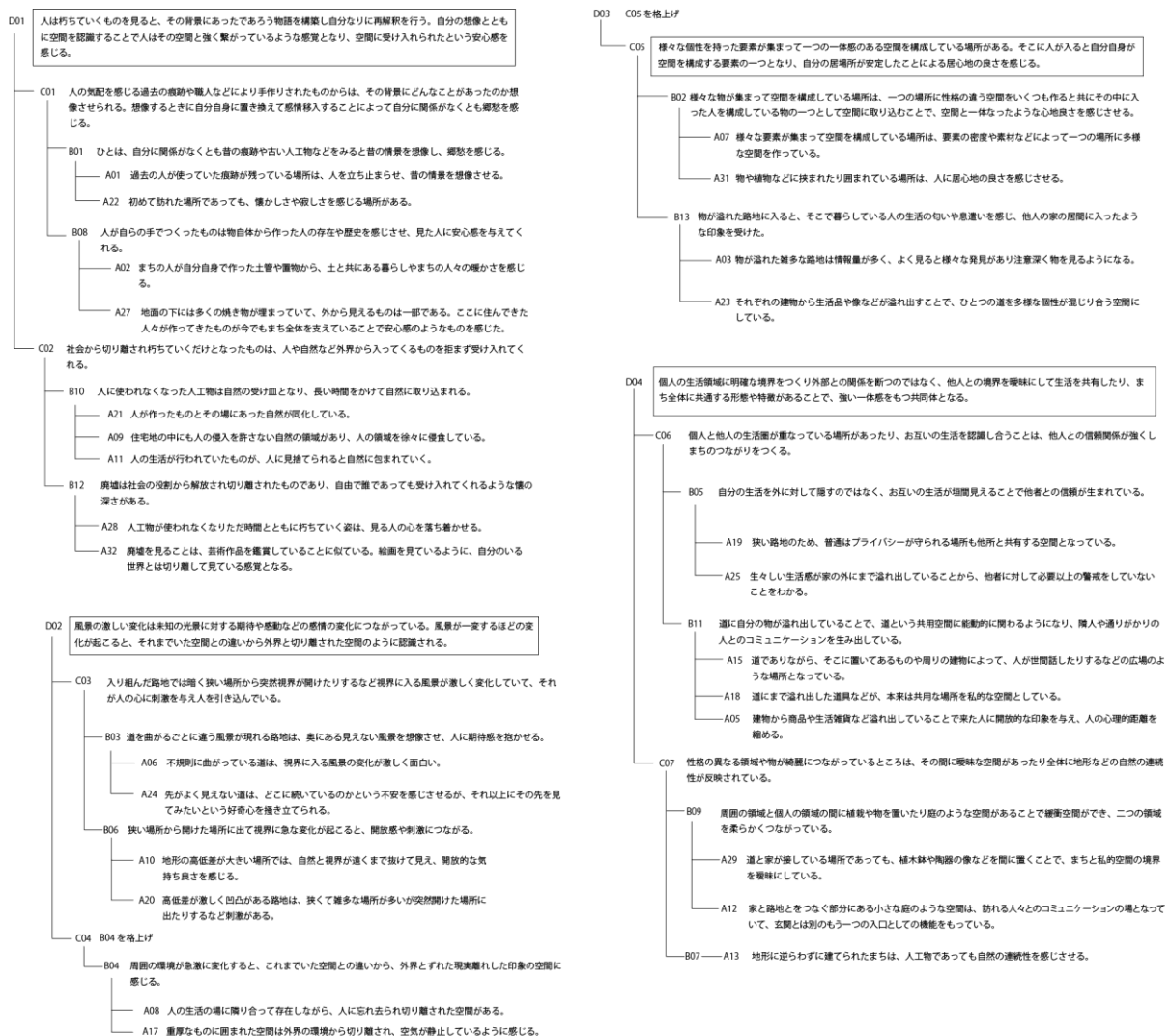


Fig.2 A~D グループの表題 (表札) 階層